

Column 2



研究所昔語り：東大寺二月堂修^{しゅにえ}二会の調査研究



「芸能」、とは演劇や舞踊、音楽、話芸など、人間の身体を用いて表現をする形の残らない芸術活動をさす用語です。昨今では芸能界、芸能人といった用法がポピュラーですが、能楽、文楽、歌舞伎などの鑑賞芸能が日本の伝統芸能として認められていますし、地域の生活に根ざして各地で数多くの民俗芸能も行われています。

芸能部が研究対象に選んだ寺院行事、法会は一般には芸能とは認められていませんが、僧侶によって唱えられる声明の美しさ、洗練された所作、という点で芸能としてとらえるべきではないか、というのが部の主張でした。法会を「^{ほうえ}寺事」と名づけた横道萬里雄は、「仏教では仏法僧の三宝ということをいうが、広義の「仏」を芸術的に表現したのが仏教美術であるなら、「僧」によって「法」を芸術的に表現したものが、仏教芸能すなわち寺事と言えるのではないだろうか」と述べ、典礼芸能という語を考案しています。寺院で行われる仏教行事を、宗教行事ではなく体現芸術として見ようという視点を打ち出したのです。

法会で唱えられる声明は、能楽や平曲の発生、伝承に計り知れない大きな影響を与えました。法会

では雅楽も演奏されましたから、法会は日本の芸能の母胎といってもよく、寺院行事の解明は、日本の伝統芸能の伝承解明に欠くことができない重要性を有しているのです。

数ある法会の中で最たるものとして、大規模に調査を行ったのが、東大寺二月堂修二会（俗称お水取）でした。年の初めにその年の安穏豊稔、除災招福を願って行われる法会ですが、天平勝宝4年始行と信じられ、不退の行として東大寺が焼失した年ですら滞ることなく毎年勤^{ごんしゅ}修されてきました。

現在では、2月20日から2月末日まで、法会の準備を行いつつ身を清浄に保つ「^{べっか}別火」を行ったところで場所を二月堂に移し、3月1日深夜から15日の未明にわたって1日に6回、本尊の周りを行道し、本尊の御名を讃歎し礼拝をくりかえします。6回とも少しづつ所作や唱えるフシを



東大寺二月堂修二会勤行中の僧侶
写真：吉越立雄

変えていますが、声明のフシの美しさ、リズムのおもしろさ、洗練された所作の美しさは独特です。そのほか日によって付帯する行事があり、東大寺ゆかりの人々の過去帳を読む日、天上で行われている行に追いつかんと堂内を走って行道する「走り」、堂内で松明を引き回す「達陀^{だつたん}」など、複雑に入り組んだ次第のなかには民間の祈年習俗や神道、修験などと共通した要素も融合され、さまざまな点で聴聞者を魅了してやまない法会となっています。

堂内は女人禁制、別火中はさらに厳しく調査は制限されますが、この調査を中心になっておこなったのが佐藤道子でした。1967（昭和42）年から6年間、集中的に調査をおこない、紀要『芸能の科学』6,7,12,13号（1975・1977・1980・1982年）に、行事の次第や内容、所作、声明について詳述しました。これは法会研究の嚆矢として外部の研究者から高く評価されましたし、この調査に基づいてビクターが1971年に作成した6枚組のレコード『東大寺修二会^{かんのもんげか} 観音悔過』は、同年度の芸術祭優秀賞を受賞し、寺事の重要性を広くアピールすることとなったのです。

宗教行事の一環として、現在では重要無形文化財の指定対象にはなりえないジャンルですが、対象にならないからこそ、また他機関では行にくい面があるからこそ、国立の機関でおこないえた重要性は大きいと言えるでしょう。非公開の部分も多く、寺院からの配慮をいただかなければ調査はかないませんでした。寺院との深い信頼関係を築いたからこそ長年にわたる調査を完遂できた、その意義を大切にしたいと思います。



手書きの調査報告を載せた
「芸能の科学」全4冊



ビクターレコード
「東大寺修二会観音悔過」の解説書

（無形文化遺産部・高桑いづみ）